

# 名詞性をもつモダリティの否定形式について

加 藤 陽 子

## 1. はじめに

日本語の初級教科書『日本語初歩』19課本文には次のような文がある。

(1) 会社につとめるつもりですか。

いいえ、会社につとめるつもりはありません。

モダリティ「つもりだ」は、形式名詞の「つもり」と判定詞の「だ」からなるものである。もしこのような形態的な性質を考えるならば、「本だ」の否定形が「本ではない」になるように、「つもりだ」の否定形も「つもりではない」になり、日本語を外国語として学習する学習者にも、「つもりではない」の方が名詞述語文の否定という生産的ルールに則ったものとして分かりやすいといえよう。しかし、実際に使われているのは上記の「つもりはない」の形式であり、(1)を「つもりではありません」にすると何か、質問の答えとしてそぐわないという印象を受ける。では、「つもりだ」の否定形式は「つもりではない」と「つもりはない」のどちらなのであろうか。

この二形式の存在を認め、どちらを使うかということの判断を明確に記した先行研究は少ない。Makino and Tsutsui (1986) では、直接的にこの二形式の比較はなされていないが、「つもりはない」は「ないつもりだ」より強い否定を表わすとした上で、「つもりではない」の形式は使われない、としている。一方、Maynard (1990) では、「つもりがある」や「つもりはない」のように、「つもり」が名詞的に使われる場合があることを認めながらも、その否定形は「つもりではない」または「ないつもりだ」であると判断している。このように、「つもりだ」の否定形式には二つの形式が想定されるのにもかかわらず、どちらが正しい用法なのか、または二形式とも存在し、意味や用法上の差異があるのかといったことについては、まだ十分な考察がなされていないようである。

本稿では、形式名詞（以下Xと表す）+判定詞（以下「だ」で表す）の形態をとどめるモダリティについて、「Xではない」（つもりではない）と「Xはない」（つもりはない）の二種類の否定形式が存在するという立場に立ち、この二形式の差異、そしてそれがどこから生まれ、何に起因するかを明らかにすることを目的とする。

## 2. モダリティと否定

本稿は「Xだ」という形態を持つモダリティの否定形式を考察するものであるが、モ

ダリティと否定の関係については、いくつか異なった見解が出されている。モダリティを、話者の発話時における心的態度として、モダリティに否定の形式を認めない立場(中右(1979))などもあるが、否定形式をもつものを疑似モダリティとして位置づける立場(仁田(1991))や、モダリティに否定形式を認めようとする立場(寺村(1979))などもある。また、これらの、モダリティの定義に関わる「モダリティに否定を認めるか」という問題に加えて寺村(1979)が示した命題内の否定(「しないつもりだ」のような形式：内の否定)とモダリティの否定(「するつもりはない」のような形式：外の否定)との差異という問題もある。しかし本稿ではそれらの問題には当面触れずに、「Xだ」の否定「Xではない」と「Xはない」が、どのように使われていて、差異がある場合、それは何であるかということに注目して観察してみたい。なお、本稿では、非過去(ル形)のテンスを持つ「Xだ」を中心にして考察していきたい。

### 3. 「つもりだ」について

「形式名詞+判定詞『だ』」の形態をとるモダリティは、「つもりだ」の他に「はずだ・わけだ・ものだ・のだ・ようだ・そうだ(様態)・ことだ」等がある<sup>(1)</sup>。全体的な考察は5節に譲り、最初に「つもりだ」について、「つもりではない」と「つもりはない」の差異を考察する。

#### 3.1 「つもりだ」と人称制限

3.2以降では、「つもりではない」と「つもりはない」の差異を、主語の人称制限という観点に注目して考察する。まず、その前に、「つもりだ」自体の人称制限を観察する。

(2) 私/彼は来年には帰国するつもりです。

上記のように、肯定形のモダリティ形式「つもりだ」は、「行こう」などのモダリティに見られるような「一人称である発話者の心的態度を表す」という人称制限がゆるく、発話者が感情的に移入している(empathized)場合には三人称主語と共に使える場合もある。(Makino and Tsutsui(1986:505))従って、「つもりだ」の否定形式「つもりはない」も「つもりではない」も、一人称のみならず三人称主語にも使われる可能性がある、ということが推測できる。

それでは、以下で、「つもりではない」及び「つもりはない」の差異を、主語の人称別に考察していく。

#### 3.2 「つもりはない」が選択される場合

まず、「つもりはない」が自然に使われる例を観察する。当該の文脈上で許容度が落ちる文には\*が付けられている。

- (3) 人助けのためだったら、少し法に触れることをしてもいいんじゃないですか。
- a いいえ、どんな状況の下でもわたしはそんなことをするつもりはないですよ。
- \* b いいえ、どんな状況の下でもわたしはそんなことをするつもりではないですよ。
- (4) 今夜のパーティーには行くつもり？
- a いいえ、パーティーに行くつもりはないわ。
- \* b いいえ、パーティーに行くつもりではないわ。

このような例を観察して気が付くのは、一人称、つまり発話者である自分の意向を述べるのに、「Xではない」の形式をつかうと、すわりの悪い文になってしまう点である。では、一人称以外の意向ではどうであろうか。

以下の例では、「三人称主語と共起する『つもりだ』の否定形に『つもりはない』を使うと、発話者が三人称の主語に成りかわって発言しているという印象を与えること」及び『『つもりではない』にするとそのような印象が薄れること』の二点が観察できる<sup>(2)</sup>。

- (5) 田中：「山田さん、長男の太郎君は、来年修士課程を卒業だってね。  
太郎君は卒業後、博士課程へ行くつもりなの？」
- 山田：「 a いや、うちの太郎は進学するつもりはないよ。」  
\* b いや、うちの太郎は進学するつもりではないよ。」

「つもりはない」にはこのような印象を与える効果があると考えられる。そのため、もし発話者が三人称主語の意向を代弁し得ないような疎遠な関係であったり、(6)のように、発話者と三人称主語との関係が聞き手にわからなかったりする場合には、発話者は、三人称主語と近い関係にあることを強調できる一方、聞き手には、発話者が三人称主語の心理的な領域を侵している様に聞こえてしまう。

- (6) 花子の昔の恋人甲：「花子に会わせてくれ」
- 花子の今の恋人乙： a 「花子はおまえに会うつもりはない」  
\* b 「花子はおまえに会うつもりではない」
- 甲：「おまえは花子の何様のつもりだ？」

以上のことから、「つもりはない」という形式は、基本的には発話者である一人称の意向を述べる形式であると言えるのではないだろうか。それ以外の場合は、先に述べたように、発話者が三人称主語に心理的に近づき感情を移入して述べる、という語用論的效果を生み出す場合である。

### 3.3 「つもりではない」が選択される場合

ここでははじめに、三人称主語の場合について考察する。

モダリティの否定形式が三人称主語と共に使われる場合は3・2でも観察した。そこでわかったことは、(5)・(6)のaのように、発話者が三人称の主語に感情移入して述べるような語用論的效果を狙う場合にも「つもりだ」が使われ、その否定形式は「つもりはない」になるということだった。確かにそのような場合には三人称の意向という心理的な領域に踏み込むことが可能である。しかし本質的には、三人称の意向というものは発話者には知り得ないものであると言えるのではないだろうか。実際、三人称の意向を言語的に表現した場合、語用論的效果という、本来の文がもっている機能以外の機能が生まれてしまうことからそれがわかる。しかし、ここで注目したいのは、発話者には本当の意味で知り得ないその三人称の意向を、状況描写的に述べる場合にも「つもりだ」が使われ、その否定形式が(7)のように「つもりではない」になるということである。(7)は、日本語のクラスで次のような絵カードを見せて、教師が絵についての状況描写を行うときの発話である。

- (7) 田中さんはパーティーに行くつもりです。  
ネクタイもしめているし、スーツも着ているし、  
すっかり準備ができています。  
しかし、山田さんは行くつもりではありません。  
残った仕事を片づけなければなりません。



意向をどのように表明するかは、人称によって違いが見られる。一人称、つまり発話者の意向の表し方については後述するが、三人称の意向の表明は、感情移入をして述べる場合か、三人称の状況を描写的に述べる場合にだけ可能になると考えられる。前者の場合については既に(5)(6)で観察したが、三人称主語の状況を描写的に述べる場合には(7)のように「つもりではない」が使われている。三人称の意向を状況描写的に述べるといふ点については、次の例を見ていただきたい。「つもりだ」の否定形式の後ろにさらにモダリティ形式「だろう(でしょう)」がついた例文である。

- (8) 王子の前から消えてしまったシンデレラを捜すために、町中の女性が舞踏会に招かれた。シンデレラの姉たちは新しいドレスに着替え、お化粧をし、楽しそうに準備をしている。新しいドレスを持たないシンデレラも、せめてこぎれいにしていこうと、洗いたての服に着替えている。それを見た姉達が母に言う。
- 「\* a シンデレラはまさかパーティーにいくつもりはないでしょうね。  
b シンデレラはまさかパーティーにいくつもりじゃないでしょうね。  
あの子、招待されてなんかいないのに、汚いドレスに着替えているわ。」

(8)では、aよりbのほうが自然に感じられるのではないだろうか。それは、bが、シンデレラが洗いたての服に着替えているという、前提として存在している状況を基に下した判断が正しいか否かを問うている文だからなのである。つまりbは、ある状況を見て、それを叙述(描写)する仕方が正しいか否かを問う文なのである。一方aでは、「行く」という意向が、シンデレラにあるかないか、という意向自体の存在、非存在を問題にしている文であると言える。従って、(8)のような、状況を基にその描写の仕方を問題にするような場合は、「Xはない」より、「Xではない」の方が自然になるのだろう。

では、一人称主語の場合はどうであろうか。

A子：「B子、あんた最近顔がムクんでるんじゃないの？」

B子：「何よ、どういうつもり？太ったって言いたいわけ？」

(9) A子：「そんな(事言ってる)つもりじゃないんだけど…。

ただ、なんか体の調子でも悪いのかと思って…。」

ここからわかるのは、一人称主語の場合でも、上記で述べたように、存在する状況を基にその描写の仕方を問題にするような場合は、「Xではない」の形式を用いることが可能になる、ということである。この例では、前提として、A子はB子の体調を心配している。しかし、B子はA子の意向、質問の真意をはかりかね、それが「太ったと言いたい」という意向であるのかを聞いている。(9)では、A子は、B子が提出した意向の叙述の仕方が適当ではないとして、「Xではない」の形式を使って否定しているのである。

前節3.2では、一人称主語の場合に使われた「Xはない」を観察した。従って、(9)でも「Xはない」の形式を用い、「そんな(事言ってる)つもりはないんだけど」にすることも可能である。この場合は、B子の「太ったって言いたいわけ？」という質問を、そのような意向があるのか、という意向の有無を問う質問とみなして「そのような意向はない」と答えていることになる。(但し後続文の存在により「Xではない」の方が自然なようであるが。)この様に、一人称主語の場合、「Xだ」の否定形式は「Xはない」「Xではない」の両方が許容される事がわかる。しかし、この二つに、それぞれ「B子が提出した意向の存在を否定する」と、「B子が提出した意向の叙述の仕方を否定する」という意味の違いが存在することは、(8)での観察と同様である。

以上の観察から「つもりだ」について、「Xはない」と「Xではない」の形式の差異をまとめると、次のようになる。

(10) 「つもりはない」は一人称主語の意向「つもりだ」の存在を否定する形式である。

一人称の意向の存在を否定する、という点で、主観的な形式であるともいえる。三人称主語の意向の非存在を表すために使われた場合は、その主観性により、三人称主語の意向を発話者が代弁しているという効果を生み、発話者と三人称主語の心理関係の近さを印象づけるという語用論的な効果をもたらす。

一方、「つもりではない」は、一人称・三人称主語の両方に用いられ、主語の意向を状況描写的に否定する場合に使われる形式である。言い換えれば、主語の意向の存在を認めた上で、その意向の描写の仕方の適切さを問題にする形式である。

#### 4. 「存在の表現」と「題目一解説文」

以上、「つもりだ」を使い、「Xだ」の否定形式「Xではない」と「Xはない」の違いを観察してきた。本節では、これらの差異が生まれる原因を、種類を異にする2つの文、つまり「存在の表現」と「題目一解説文」の違いに求めて説明を試みる。

「Xだ」の形式をもつモダリティは、Xが形式名詞として使われるという側面があるため、(11a) (11b) の各文と平行する構造を持つ。

(11 a) ～に本はない……………～に～スルつもりはない

(11 b) (これは) 本ではない ……………～は～スルつもりではない

(11 a)・(11 b)の左側の文は、肯定形ではそれぞれ「～に～がある(～に本がある)・「～は～である(〔これ〕は本である)」である。前者は、寺村(1982)でいう「存在の表現(所有、所属的存在)」の否定形、後者は「題目一解説文」の否定形にあたる。従って、その二種類の文に平行する「つもりだ」の二種類の否定形式も、存在の表現と「題目一解説文」との差異に平行した性質を持つことが予想される。存在の表現は、基本的に、事物や事態の存在(非存在)を述べる文である。「(私には)本はない」という文は、「私は本を所有していない」「私に所属する本は存在しない」ということを述べている。これに対して、「題目一解説文」は、事物や事態の存在を前提として、存在するものに対する叙述の仕方がどのようなものであるかを述べている。「(これは)本ではない」では、本ではない何物かの存在は前提とされており、その既に存在しているものを「本」とは叙述しない、といっているのである。

つまり、(11 a)の存在の表現に平行する「つもりはない」は、意志が存在するかしないかに焦点を当て、意志が存在しないということを述べる形式である。意志の存在は前提にはなっていない。一方(11b)の「つもりではない」は、ある意志が存在することを前提とした上で、その意志の叙述の仕方が適当ではないとして、叙述の仕方を否定する形式であると言える<sup>(3)</sup>。

このように、意志の有無を問題にする形式と、意志の叙述の仕方を問題にする形式という違いがあるため、基本的に、一人称である自分以外の人には知り得ない自分の意志の有無を問題とした場合は「つもりはない」が使われ、意志の存在を前提とした上でその叙述の仕方を問題とする場合には状況描写的な「つもりではない」が使われているのだということがわかる。このように、モダリティ形式「つもりだ」の否定形式「つもりはない」と「つもりではない」の違いは、「つもり」を名詞として捉えた場合の平行する二種類の文の差異に反映されたものであるということが出来る。

以上、「Xだ」の形をとるモダリティ形式の代表として「つもりだ」を取り上げ、その二種類の否定形式の差異、使い分けの要因を観察してきた。それでは、「Xだ」の形をとる他のモダリティの否定形式はどうであろうか。

## 5. モダリティ「Xだ」の否定形式

表1で、前節まで扱わなかったモダリティについて、否定の二形式（Xではない・Xはない）及び各々のモダリティに「ない」が前接した形式（ないXだ）の有無を掲げる。○はその形式が存在すること、\*はしないこと、△はあまり自然ではない形式を表わす。Vは動詞、adjは形容詞を指す<sup>(4)</sup>。

表1を見る限りでは、各々の形式によって、「ないXだ・Xではない・Xはない」の分布に、ばらつきが見られる。様態の「そうだ」の様に、前接する品詞によってその否定形式を変えるもの、「ようだ」のように比況と様態の違いにより「Xではない」の分布を異にするもの、「ものだ」「のだ」の様に、「Xはない」の形式をとらないもの等、様々である。従って、表から、「Xではない」と「Xはない」の二形式が存在するのは、「つもりだ」の他には「はずだ」「わけだ」の2つだけ、ということがわかる<sup>(5)</sup>。

実現する意味・用法毎にこれらを詳しく分析するには紙幅が限られているが、この二つの違いは、大筋で3節の(10)で示した結論と一致すると言える。つまり、「Xはない」は、発話者の意志（「つもりだ」）や実現が予想されること（「はずだ」）や論理的に導かれた帰結（「わけだ」）の存在の有無を問題にする形式で、Xの部分が実現しそれが存在する可能性が無い、と述べる形式であり、「Xではない」は、存在が前提とされている意志・実現が予想されること・論理的に導かれた帰結の、叙述（描写）の仕方を問題にする形

表1 名詞性をもつモダリティの否定形式

	ない X だ	X ではない	X はない
つもりだ	○ ないつもりだ	○ つもりではない	○ つもりはない
はずだ	○ ないはずだ	○ はずではない	○ はずはない
わけだ	○ ないわけだ	○ わけではない	○ わけはない
ものだ	○ ないものだ	○ ものではない	* ものではない
のだ	○ ないのだ	○ のではない	* のはない
そうだ (様態)	○ adj なさそうだ △ V なさそうだ	○ adj そうではない ○ V そうではない	* adj そうはない ○ V そう二(モ)ない
よ(比況) う だ(様態)	○ ないようだ ----- ○ ないようだ	○ ようではない ----- * ようではない	* ようはない
ことだ	○ ないことだ	* ことではない	○ ことはない

式なのである。例えば、「わけだ」を用いた次の例を見ていただきたい。(12)は一人称主語、(13)は三人称主語の例である。

- (12) 私は、少々値段が高くて品質のいいブランドものの服を着ることにしているが、  
a 別に見栄をはっているわけではない。  
\* b 別に見栄をはっているわけ（は／が）ない。
- (13) a 彼女は彼がお金持ちだから結婚したわけではない。  
\* b 彼女は彼がお金持ちだから結婚したわけ（は／が）ない。

以上の例は、論理の帰結という叙述内容を否定している例であるから、「Xではない」の形式が適合する。(12)では、主語は一人称である発話者である。aは「『ブランドものの服をきている人は見栄をはっている』というのが一般的な推論だ。しかしこの推論の叙述の仕方は私の場合適切ではない」という論理の流れを持っている。しかしbの「Xは（が）ない」にすると、自分が主観的に分かることをわざわざ推測し、その推測の存在を、再び自分で否定してしまうという矛盾を起こしてしまう。そのためbが不適当になると考えられる。

一方、次の(14)では、発話者が導いた論理の帰結「田中さんが佐藤さんと結婚できる」の存在を強く否定するコンテキストなので、「Xはない」の形式が適合している。

- (14) 甲：「ねえねえ、知ってる？田中さん、先週佐藤さんと結婚したんだって。」  
乙：「嘘でしょう？田中さんは三ヶ月前に村野さんと結婚したばかりよ。」  
\* a 結婚できるわけではないわ。」  
b 結婚できるわけは／がないわ。」

## 6. まとめ

以上の観察から、以下のようなことが言える。

- (15) 「形式名詞+判定詞」(「Xだ」)の形態を持つモダリティが「Xはない」と「Xではない」の二つの否定形式をもつことができる場合、「Xはない」は、人称制限がある場合には主に一人称の主語をもつ文に現れ、発話者の意志・実現が予想されること・論理の帰結の存在を否定する、発話者の主観的な態度を述べる形式である。

「Xではない」は、人称に関係なく、存在が前提とされている、意志・実現が予想されること・論理の帰結などの叙述(描写)の仕方を否定する形式である。

この差異は、「存在の表現」の否定形式「Xはない」と「題目一解説文」の否定形式「Xではない」との違いに平行的で、Xが名詞的性質を持っていることにより生じる。



## 7. 残る問題

本稿で最後に問題にしたいのは、モダリティ「Xだ」と、その否定形の形態面・意味面の関係である。本稿では、一人称である発話者の主観的な態度を述べる形式は、肯定形では「Xだ」であり、否定形では場合により「Xはない」「Xではない」の両方の形式が用いられると述べた。従ってこれらのモダリティ形式間では、形態と意味が平行していないことがわかる。つまり下記(16)では、A「つもりだ」は、形態的なルールではCの「つもりではない」と対応関係がある一方、意味的な側面から見れば、Bの「つもりがある」から導き出されるDの「つもりはない」とも対応しているのである<sup>(6)</sup>。

- (16) A：会社に勤めるつもりだ                      C：会社に勤めるつもりではない  
      B：会社に勤めるつもりがある                D：会社に勤めるつもりはない

この、形態と意味との関係は、どのように説明されるのであろうか。元来状況描写的・叙述的であった、Xを底の名詞とする連体修飾節が、判定詞「だ」と結び付き、文末に位置することによりモダリティ形式として扱われ、肯定の「Xだ」という形では、主観的な発話者の心的態度を表すようになったとも考えられる。また、一方では「つもりがある」のような「Xがある」という形式を、モダリティの中でどのように位置づけるかという問題も存在する<sup>(7)</sup>。「Xだ」の形態を持つモダリティ形式のXがどの程度名詞性を保っているかということと併せ、これらの問題の考察をこれからの課題としたい。

### 注

- 1：「Xだ」の形態をもつものには伝聞の「そうだ」も含まれるが、これは、モダリティというより情報の得方を表すカテゴリーと考えられるので、本稿では考察の対象にはしない。
- 2：これには、本来発話者には分かり得ない三人称主語の意向という心理的な領域を侵してしまうといった、いわゆる「情報のなわばり」に関連する問題も関係していると思われる。
- 3：この二種類の型を否定文と疑問文との関連で述べたものに益岡(1991)がある。益岡(1991)では、「Xだ」の形態を持つ「のだ」を中心に観察が行われ、二つの型が「存在判断型」「叙述様式判断型」と命名されている。これらの区別は、「Xだ」の形態を持つモダリティ一般にとって、重要な概念であると考えられる。
- 4：「有名だ」などの、いわゆるナ形容詞の一部にはこれに準じないものがある。  
c. f. \*有名そうではない (○元気そうではない)
- 5：「はずだ・わけだ」の場合は、判断の主体は主語等の形で格として現れないため、人称に関する記述は「つもりだ」と同一ではない。これらに人称制限がないのは、「はずだ・わけだ」が「つもりだ」のような意志のモダリティではなく、説明のモダリティという別の意味的なカテゴリーに属しているからであろう。
- 6：但し、「Xがある」という形態は「つもりだ」にしか存在しない。  
c. f. \*行くはずがある\*行くわけ(=理由ではない)がある
- 7：これらについては寺村(1978)に詳しい考察がある。

### 主要参考文献

- 神尾 昭雄 (1990) 『情報のなわばり理論』大修館書店  
中右 実 (1979) 「モダリティと命題」『英語と日本語と』くろしお出版  
仁田 義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房  
寺村 秀夫 (1978) 「連体修飾のシンタクスと意味」『日本語・日本文化』7号 大阪外国語大学留学生別科 (寺村 (1992) に再収)  
———— (1979) 「ムードの形式と否定」『英語と日本語と』くろしお出版  
———— (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版  
———— (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版  
———— (1992) 『寺村秀夫論文集 I』くろしお出版  
益岡 隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版  
Seiichi Makino and Michio Tsutsui (1986) 『日本語基本文法辞典』The Japan Times  
Senko K. Maynard (1990) 『日本語の文法とコミュニケーション・ストラテジー』The Japan Times  
鈴木忍・川瀬生郎 (1981) 『日本語初歩』国際交流基金

### 謝辞

本稿は、国際大学藤村泰司氏、松田由美子氏との討論の中で生まれたものであり、両氏に多大な学恩を受けています。特に、例文(8)・先行研究の存在などは、藤村氏の御教示によるものです。また、園田学園女子大学の野田春美氏、東京都立大学大学院の土岐留美江氏をはじめとして、軽井沢文法研究会では本稿に関する貴重なご意見を様々な方から頂きました。ここに改めて諸氏に感謝の意を表したいと思います。

(国際大学 日本語プログラム助手)